

中岡慎太郎先生

遠祖の地

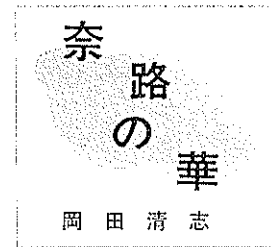
上倉部落にある。中岡家は(三

代)平助のあとを高知城下廿世町の庄屋、寺石正道の子(四代)要七が母と共に分家して上倉の大庄屋を継いだものである。要七の娘初の寺石久左衛門の弟の配して(五代)二代目要七、その次の小伝次、その子が慎太郎である。

小伝次の時、北川郷の大庄屋となり柏木に移り、小伝次が六十歳に近い時、天保九年(一八三八年)四月、慎太郎が生まれた。母うしは中の浜の庄屋田島祐之助の娘である。

上倉代々の墓所は、惜しいとに終戦後、潮江山に改葬され、屋敷跡には南国市の標柱が建てられ、往時をしのんでいる。

中岡先生の妻は市教育長利岡富次先生の、おじいさんの姉に当たられる。過ぐる昭和四十三年初冬の日、実崎の坂本公園で亀岩出身の坂本志魯雄先生をたたえる頌徳碑と、中岡慎太郎先生遠祖



の地の記念碑(奈路出身、文博・宮本正清先生の私財による)除幕式が行なわれた。利岡先生のお孫さんの手によって築ある除幕がな

るのは喉頭痛による音声の障害です。喉頭癌は全癌腫の約四割を占めています。痛、乳癌などに較べると頻度は少ないが、肺癌などと同じく、近年増加の傾向にあります

を組み合わせながら高知城下と北山越しに、風雲急なる京や江戸との往來の道すがら共に足を止め、或は志士達との密議がよくこの地でも行

されたことは、誠にほほえましく、うれしい限りである。坂本竜馬先生遠祖の地が、東隣りの瓶岩才谷で上倉とは指呼の間にある。想えば共に手を取り合っ

われたと伝えられる。奇しくも両雄の血すじは、そのかみ遠く陽の光ゆたかに緑に映えるわが南国市北陵の山ふところを清らかに流れていたのである。

窓(まど)のずい道

幕末にほど近いころ、桐間という山内藩家老の領地であったこの奈路の地に、田野々部落がある。

文字通り苦心惨たんの末、幸いに崩土もなく貫通している。最後の鍛のふれ合う劇的シーンの場所が、アポロ月着陸と同様、その的中さに驚く。だが測量機のない時代の山中の悲しさ、少しのずれを見受けられるところ、また苦勞の跡がうかがわれ胸の痛むのを覚える。山塊の底をつらぬきその長さ約四十メートル、田野々は灌漑用地として三町歩余りの美田と化し、その余り水は遠く川しも部落の旱害を救っている。

頭痛の丸〇割以上は喫煙者で、四〇割は声を過酷に使用する人に見られます。声の変化はしばしば風邪、飲酒、肺炎などによって誘発されます。前に述べた声の健康に

ずい道入口の石ぶみに苦むして次の文字がかすかに残っている。そして今日も甘露の流れ、せんかんと古人の思みを語りつつ、音立てて、ずい道にうず巻き、ふるさとの土をうるおし続けている。

声の衛生



医学博士 柳原尚明

以上からもわかるように声の健康を保つには、声の過酷な使用はできるだけ避けるべきで、もし声を使い過ぎたならば十分に休養をとるべきです。風邪を引いた場合など、早期に治療に心がけ、声帯の炎症をできるだけ軽くしましょう。炎症のある間は声の使用を避け、禁煙をするなどを実行することです。声の障害の中で最も注意を要す

す。四十〜六十歳台の人は決して警戒を怠ってはならない疾患の一つでもあります。多くの喉頭癌の初期症状は々し

注意すれば、喉頭癌は避けることができます。喉頭癌がかなりの程度に進むと、喉頭を抽出しなければなりません。結果として声が失われ、言葉による意志の疎通は大

ります。筆者紹介 一九六九年インターナショナルプライズ受賞(四年目に一名世界中の医学者の中で選ばれる国際賞)

奈路村 泰四郎 放附川用拔り 世粹 代七 (筆者は奈路小学校長)

みんなの広場